

第9回 大賞(金の星賞)受賞作品

「うそつきねこムクリ」

群馬県 県立高崎東高等学校 3年 吉澤 仁衣那



賢治のまちから
高校生★童話大賞



大賞〈金の星賞〉

『うそつきねこムクリ』

群馬県 県立高崎東高等学校 三年 吉澤 仁 衣 那

とある森の、ある小高い丘の上に、「うそつきねこムクリ」の石像がある。遠い昔、ムクリといううそつきねこが、たくさんの嘘をついた罰として、石にされてしまったのだ。森に住む動物たち、特に子どもを持つ母親は、よく自分のこどもにこう言っただけで聞かせた。

「嘘をつくよ、ムクリみたいに石にされてしまうよ」と。

けれど、森の木々は知っている。森の木々だけが、知っている。

ムクリがついた最後の嘘を。石になった本当の理由を。

あるところに、たくさんの動物がすむ森があった。そこで一匹のねこがうまれた。

母親はその子ねこを産み落とすと同時に死んでしまったが、そのねこはムクリと名づけられ、すくすくと育った。

ところで、ムクリの生まれた日の夜、暗い空できらきらと輝いていた星たちが、一斉に空を滑り落ち、どこか遠くに流れていく、という不思議なことが起こった。動物たちは空を見上げて目を丸くした。まだ目の開かない生まれだてのムクリだけが、のんきに眠りこんでいた。この辺りで一番長く生きている、

占い師のふるぎつねは、ムクリは何か不思議な力を宿すねこだろうと予言した。

やがて、ふるぎつねの言うとおり、ムクリが不思議な力をもっていることがはっきりした。右足に不自由を持って生まれたムクリだったが、ムクリが話すことは、なんとすべて本当のことに変わるのだ。

ムクリの父親はとても喜び、神様が授けてくれたに違いないから、その力を大切にしないさいとムクリに教えた。そして、その力は自分以外の誰かのために、どうしても必要なきにだけ使うようにと注意をあたえたが、ムクリはそれが気に入らなかつた。

ムクリは時々、父親に隠れて自分のことに力を使った。小腹がすいた時や、喉のどがかわいた時、こっそりと甘い木の実や上等なミルクを出しては楽しんで



だ。父親が自身の死を悟り、ふらりと出かけたきり二度と戻らなくなると、ムクリはますます身勝手なことに力を使うようになった。森にすむ動物たちを、ムクリはよく嘘でからかった。その嘘がすべて本当のことにかわるものだから、動物たちはムクリを恐れ、気味悪がり、近づこうとしなかった。ムクリはいつも独りだったが、それを気にしなかった。

あるときムクリは、森の奥で魔女に会った。背の高い、すらりとした細長い手足が、黒いマントからはみ出ている。ムクリには、それが動物たちが噂し、恐れている魔女だとすぐにわかった。そして、ひとつからかってやろうと決めた。ムクリに怖いものなどなかった。

「やあ、ばあさん。どうしたんだい」

ムクリが声をかけると、魔女は三日月形の日をさらに細め、いやな感じのするきんきん声で言った。

「おやおや、こんにちは。木苺をさがしに、はるばる山二つ越えてやってきたんだがね。どこかでいいの見なかったかい？ あたしや、あれが大好物なんだ」

ムクリはそれを聞くと、笑って言った。

「そんなら、ばあさん。あんたの後ろに、でっかくて熟れたやつがあるじゃないか。気がつかなかったのかい？」

ムクリはいつものように嘘を言った。たちまち魔女の後ろに、大きくてよく熟した木苺がたくさん現れた。魔女は訝しげに振り返り、そして嬉しそうに声を上げた。しかし、魔女がそれを拾おうと腰をかがめたとき、ムクリはまた口を開いた。

「おっと、ばあさん。ちがうよ。木苺があるのはあんたの後ろ、って言ったじゃないか」

魔女が手を伸ばした先で、木苺はぱっと消え、また魔女の後ろに姿を現した。

魔女が振り返って手を伸ばすと、ムクリはその度に嘘を言って木苺を移動させた。しばらくそれを繰り返し、最後に魔女の頭からばらばらと木苺を降らせたところで、魔女はついにかんかんになった。

大笑いするムクリに骨ばった長い指をつきつけ、魔女は恐ろしい声で叫んだ。

「お前に呪いをかけてやる！ いいかい、次に嘘を言ったそのときが、お前の最後だ。どんなに些細なことでも、なにか嘘をついたとたん、お前はただの石になるんだ！」



ムクリは笑うのをやめた。

「そんな、まさか」

「嘘だと思うなら、今ここで嘘をついてごらん！ そうしたら、まちがなくなってお前は終わりだよ。今殺してやってもいいんだが、あたしゃ、あんたみたいな汚い毛皮はいらないでね」

魔女は甲高く笑うと、木苺を踏みつけて去っていった。

ムクリはそれから、石になるのを恐れるあまり、すっかり無口になった。森の動物たちはその様子を不思議に思ったが、ムクリに近づいて訳を尋ねるものはいなかった。

あるとき、森に一匹のたびねこがやって来た。うつくしい毛並みと、勇敢な心をもつたびねこで、名をファイイルといった。ファイイルは森中の動物たちに歓迎され、森の広場で宴が行われた。たくさんの動物が参加したが、ムクリはそれを近くの小高い丘から、いつものように黙って眺めているだけだった。

しかし、ファイイルがムクリを見つけ、ムクリのところへやって来た。

「やあ、私の名はファイイル。きみは？」

ムクリは、恐る恐る口を開いた。頭の中で、自分の言葉に嘘はないかとじっくり考えたあとで、ようやく、小さな声で言った。

「ぼくはムクリ。この森へようこそ」

ファイイルはそれを聞いて微笑んだ。

「きみはいい声をしているな」

それから、ファイイルはムクリのところにたびたび訪れるようになった。ムクリは相変わらず無口だったが、ファイイルはそんなムクリの傍らで、自らの冒険談を語り、楽しそうに笑った。ムクリは嬉しかった。月が二度目の満月を迎えた頃、ファイイルは、この森がとてもすきだと言った。以前父と母が暮らしていたムクリの家は、ムクリがひとり住むにはすこし広すぎた。そこで二匹は、一緒に暮らすようになった。

二匹はたくさんの満月の夜を共に過ごした。ずいぶん時がたった頃、ファイイルはムクリに、どうしてそんなに声を出すのを恐れているのか、訊ねた。

ムクリはしばらくじっと考え、そしてようやく、自分の力のことと、魔法にかけてられた呪いのことを、全てファイイルに打ち明けた。全ての話を聞き終えると、ファイイルは難しい顔をして言った。

「たしかにきみは、魔女に無礼なことをした。しかし、それはもう何年も



昔のことじゃないか。きみは、もう以前のきみとは違うのだろうか？ きみにはもう、そんな呪いは必要ない。魔女のところへ、謝りに行けばいい。呪いを解いてもらうんだ」

ムクリは驚いて首を横に振った。あの恐ろしい魔女のところになど、どうしても行きたくなかったし、だいいち、ムクリは魔女の居場所を知らなかった。

「その点については、心配はいらない。森の木々の、根ツトワークを知らないのかい。全ての木々はつながっているんだ、魔女の居場所など、すぐにわかる」

「でも、だめだ。ぼくの悪い足では、とてもそんな遠くまでは行かれない」力なく言うムクリを、ファイイルはじっと見つめた。すこしの沈黙があった。

「よし、それなら、私が行こう」

ムクリは驚きのあまり飛び上がり、自分のしつぽを思い切り踏んづけた。痛みにうめきながら激しく首を振ったが、ファイイルはやさしく笑うだけだった。

「ぼくのために、きみがそこまでする必要がどこにある？」

ムクリは首を振りながら、ファイイルに訊ねた。ファイイルは言った。

「きみはいい声をしている」

「そんなことが、理由になるのか」

「なるさ。私は、きみともっと多くのことを語りたいのだ。私が話すだけでなく、きみの声を、話をもっと聞きたいのだ。冗談を言って笑い合いたいし、互いの夢を語り合いたい。それだっていうのに、そんな呪いがあるせいで、こんな当たり前のことすら満足にできないだなんて。おかしいじゃないか。まちがつてる」

ムクリは、ファイイルの声に怒りがにじむのを感じて嬉しかったが、どうしていいかわからなくなった。

「私は本来たびねこだ。長旅には慣れてる。心配はいらない。必ず、私はきみの元へ帰ってこよう。そのときには、きみの呪いは解けているんだ」ムクリは最後まで弱々しく首を振っていたが、ファイイルの決意は変わらなかった。

次の日、森に太陽が昇ると、ムクリとファイイルはふたりで見つけた美味い木苺のなる場所へ行き、籠かごにどっさり熟れた木苺を摘み取った。籠をしょいこむと、ファイイルは大きな声で森の木々に語りかけた。



「森の木々よ 森の木々よ

朝日にてらされたうつくしい木々たちよ

私の友に呪いをかけた

悪い魔女はどこにいる？」

すると森の木々たちは一斉に囁きだした。たくさん囁きは、やがて重
なってひとつの声になった。

みていたよ みていたよ

わたしたちはお前たちをみていたよ

おもしろいね おもしろいね

うつくしい毛並みのたびねこよ

お前の心はとても強い

おしえてあげよう おしえてあげよう

ここから山二つ越えた先にある

湖のほとりに小屋があるのさ

魔女はそこに住んでいる

きをつけなさい きをつけなさい

あいつはとても悪いやつだよ

あいつは

わたしたちの若枝を平気で折るんだ

ファイファイルは満足そうに、木々たちにお礼をいった。

「ムクリ、私は行くよ。私の帰りを、きみはここで待っていておくれ」

ムクリは頷いた。ふたりはいちど抱き合って、そうして、ムクリはファイ
ファイルの背中がすっかり見えなくなるまで、そこでじっと見送りをした。

ファイファイルは籠を背負ってどんどん進んでいった。一つ目の山を越した
とき、籠の中の木苺をひとつとって食べた。二つ目の山を越したとき、さ
らに二つの木苺をとって食べた。そうしてしばらくいくと、大きな湖が見
えてきて、そのほとりに、ファイファイルは魔女の住む小屋を見つけた。

ファイファイルが小屋のドアをノックすると、いやな感じのするきんきん声
が返事をして、魔女が姿を現した。背の高い、すらりとした細長い手足が、

黒いマントからはみ出ている。魔女はファイフィルの姿を目に留めると、三日月形の目をつこり細め、ファイフィルを中へと招き入れた。

「うつくしい毛皮のねこや、どうしてあたしのところに来たんだい？」

「私の名はファイフィル。友人の代わりに、ここへやって来た。どうか私の友人にかけた呪いを解いてやってほしい。彼は反省している。彼にはもう、呪いは必要ないのだ」

ファイフィルはそう言って木苺の籠を魔女に差し出した。魔女はよく熟れた木苺を見るなり、籠をファイフィルからひったくった。魔女は実のところ、昔ムクリに呪いをかけたことなど覚えてはいなかったし、思い出そうともしていなかった。しかし魔女は、ファイフィルの姿を、とくにそのうつくしい毛並みをじっくりと眺めて、ねっとりとした甘ったるい声で言った。

「いいだろう、うつくしい毛皮のねこや。けれど、木苺をもらったくらいじゃ、あの呪いは解いてやれないねえ。そうだ、うつくしい毛皮のねこや。そこにある水がめの中に、あたしゃ大切な指輪を落としてしまったんだ。それを取ってくれたなら、あんたの友人の呪いをすぐに解いてやろうじゃないか」

魔女は部屋の隅すみにある水がめを指さした。それはファイフィルの背丈の倍以上の大きさで、中には縁までたっぷり水が入っていた。

ファイフィルは言った。

「わかった。あの中にもぐって、指輪を取ってくればいいのだな。そうすれば、私の友人の呪いを解いてくれるのだな」

魔女はもちろんだと請合うけあった。ファイフィルは、魔女の三日月の目をじっと見つめた。

「しかし、私はお前を信用していない。指輪を取るとは容易たやすいが、それはお前がムクリにかけた呪いを解いたあとにしよう。私は、約束は必ずまもるねこだ」

「先に呪いを解けっていうのかい」

魔女は面倒くさそうな顔をしたが、ふいに片手を上にあげると、ファイフィルには聞き取れない言葉で呪文じゅもんを唱えた。

「さき、これでお前の友人の呪いは解けたよ」

魔女はファイフィルを無理やり水がめのほうに押しやりながらにんまりした。

「さて、証拠がほしい。ムクリの呪いは本当に解けたのか」



賢治のまちから 高校生☆童話大賞

「おやおや、うつくしい毛皮のねこや。お前はなんて我侘わがままなんだろうねえ！
それじゃ、その机の上の水晶玉をのぞいてごらんよ」

魔女はそう言って古ぼけた裁縫台の上の水晶玉を指さしたが、じつはそれはのぞいた者の望みを映す水晶玉だった。

ファイフィルが水晶玉をのぞくと、そこには呪いがすっかり解けて幸せそうなムクリが映っている。それでファイフィルは、魔女がムクリの呪いを解いたのだと思った。

「ああ魔女よ、有難う！ それでは私も、約束をまもろう」
ファイフィルはすぐにかめによじ登り、中に飛び込んだ。

指輪をさがして目を凝らしていると、そこに魔女の腕がぬつと伸びてきて、水の中でファイフィルの頭をがっちり掴つかんだ。ファイフィルが暴れても、魔女の細い骨ばった指はファイフィルを水の中へどんどん沈め、とうとうファイフィルは水がめの中で溺おぼれ死んでしまった。

魔女は大喜びでファイフィルの死体をかめから取り出すと、その皮を剥はいで、うつくしい毛皮を壁に飾った。

ムクリが森でぼんやりとファイフィルのことを考えていると、急に森の木々がざわりざわりと囁きだした。

ムクリは、木々たちが自分に話しかけているのだとわかり、あわてて耳をぴんと立てた。無数の木々の枝がきしみ、悲鳴のような音を立てる。

しんでしまったよ しんでしまったよ

うつくしい毛並みのたびねこが

しんでしまった しんでしまった

魔女の小屋で殺された

魔女はうつくしい毛皮を剥いで

汚い壁に飾っているよ

しんでしまった しんでしまった

魔女にだまされ殺された

ムクリはそれを最後まで聞こうとしなかった。ムクリは声を上げて耳を両手で押さえつけ、むちゃくちゃに走り出した。それでも、森の声はムクリを追いかけて囁きかける。



しんでしまったよ しんでしまったよ

魔女にだまされ殺された

魔女にだまされ殺された

しんでしまった しんでしまった

しんでしまった しんでしまった……

ムクリは、いつもの小高い丘の上で空を見上げていた。雲ひとつない鮮やかな青空が広がっている。ムクリは確かめるようにそっと、つぶやいた。

「ぼくは、幸せだった」

そうしてムクリはしばらくじっとしていた。ムクリは自分になんの異変もないと分かると、今度はすこし、胸をはって言った。

「そうだ、ぼくは幸せだったんだ。ぼくはそれだけで満足だ」

しずかに息をすいこむと、ムクリは、空を仰いで、祈るように、叫んだ。

「ファイファイルは、生きている。笑顔で、うつくしい毛並みのままで、ぼくのところに戻ってくるんだ」

ムクリは嘘をついた。

ムクリの最後の一言が空に吸い込まれたと同時に、ムクリは空を仰いだ格好のまま、物言わぬ石になった。

気がつくと、ファイファイルは見慣れた小高い丘に立っていた。

風がゆっくりと、つややかな毛並みを撫でていく。身体は乾いてあたたかく傷ひとつない。自分の身に起こったことをひとつずつ思い出しながら、ファイファイルは辺りを見回した。

まず、目の前にムクリがたたずんでいるのに気がついた。

それから、ムクリが石になっているのに気がついた。

石像となったムクリが、空を仰いでたたずんでいる。

ファイファイルは、なぜムクリが石になったのかをすぐに理解し、あまりのことに体中の毛が逆立った。

大きな両目からはどんどん涙が溢れ出したが、なぜか笑顔のかたちをやるることができない。ファイファイルは笑顔をくしゃくしゃにして、声を上げて泣いた。

たびねこファイファイルがこの森を去ったあとも、時がたち、「うそつきねこ」



賢治のまちから
高校生☆童話大賞

の伝説だけが森に残った今も、木々はムクリの石像を風雨からそつとまもり、枝を揺らしてムクリにかかった塵をやさしく払い落としていく。
これは、語られることのない物語。
うそつきムクリが最後についた、優しいやさしい嘘の、おはなし。